ジョホール日本人学校における国際理解教育

前在マレーシア日本国大使館付属ジョホール日本人学校　教諭
岐阜県岐阜市立岐阜清流中学校　教諭　割　石　裕美子

キーワード：現地素材、教材開発、現地校授業実践、現地校視察、持続可能な社会

１．はじめに

日本にいた時から、社会科の教員として、世界の問題にとても興味をもち、国際理解に関わる授業の開発に力を入れてきた。実践を重ねるうちに、実際に世界に出てみたい、実際の様子を観察したいという気持ちが強くなり、希望をした日本人学校。この３年間で多くの資料を集めることができた。

また、マレー系、中華系、インド系と多くの民族や宗教が混じるマレーシアに赴任したおかげで、それぞれの宗教、文化、そして多文化社会において大切なことは何かをじっくりと考えることができた。

実践のはじめは、現地素材をいかした教材の開発であったが、取り組んでいるうちに、日本人の生徒だけでなく現地校で授業をしてみたい、自分の国際理解の授業は世界にも通用するのだろうかという疑問から、現地校でも実践を重ねた。ここに、その概略を紹介したい。

２．実践

(1) 実践１　現地素材をいかした教材開発　～パーム油を通してマレーシアと日本を考える～

〈利用できる単元〉

中学２年　地理的分野「世界と日本のつながり」「東南アジア」

中学３年　さまざまな国際問題

ルックイースト政策をきっかけに、マレーシアと日本の関係はとても深い。日本の電化製品の多くはマレーシア製であるし、日本で消費されるパーム油の95％以上がマレーシアから輸入している。実際にマレーシアに来てみると、パーム油のプランテーションがどこまでも続き、マレーシアがパーム油に支えられていることを深く実感した。そこで、マレーシアと日本との関係を学ぶ教材の開発に取り組んだ。

生徒の実態としては、パームやしのプランテーションを何度も見ているにもかかわらず、パーム油から何が作られているのか、日本がどれだけそれを輸入しているのかさえ理解していなかった。そこで、パーム油から何が作られているかのクイズを導入とし、食品や工業製品など私たちの使っているもののほとんどがパーム油から出来ていることを理解した上で、日本人が植物性のものを使うことが「地球にやさしい」というイメージをもっていることにふれ、本当にパーム油は「地球にやさしい」のだろうか？を考える授業展開にした。

授業は参加型授業（アクティブラーニング）の形をとり、派生図をグループで作成することでパーム油の問題点に迫るように工夫した。パーム油の生産過程の中で、多くの熱帯雨林が失われていること、それによって生物多様性の消失、地球温暖化、自然災害、有用遺伝子の減少、ヘイズ（大気汚染）、原住民の文化消失など様々な問題につながっていることを理解できるようにした。

研究会では、日本の企業を否定することになる心配があるという意見もいただいたが、パーム油を通して日本とマレーシアが深くつながっていること、マレーシアのモノカルチャー経済の危険性や、日本の生活が世界の多くの国と関わっていることなどを学ぶ良いきっかけになった。

〈授業で利用した参考文献〉

パーム油のはなし　（開発教育協会）　　ポテトチップスとゾウ　（横塚眞己人）

(2) 実践２　現地校での授業実践

実践場所　２年目　Abu Bakar 校（イングリッシュスクール）

３年目　スリアラムⅡ校（マレー系）

国際理解教育の教材を開発するだけでなく、それを現地校（マレーシアの生徒）で授業実施することで視野を広げることを目的とした。英語が得意でない自分にとっては大きな挑戦であったが、日本で教えている世界の問題は、マレーシアの問題でもあり、同じ地球市民として共に考えていくことが大切であること、マレーシアの生徒が実際どのような考え方をもつのか知りたいという思いがあり、現地のイングリッシュカレッジとスリアラム校というマレー語を主とする学校にて実践を行った。

〈授業の流れ〉

●導入

日本について学ぶ「日本のクイズにチャレンジ！」

自分が日本人であること、生徒も日本語を学び日本について興味をもっている生徒が多いことから、はじめに日本について紹介をする時間を設けた。

一方的な説明にならないようにクイズをつくり、正解を競うゲーム形式とした。生徒はゲームということもあり、とても楽しく積極的に参加してくれた。クイズの内容としては、日本の文化を中心に、日本の中学校生活にふれ、日本とマレーシアの違いや日本の良さを伝えることを主に問題を作成した。

●本題

世界について学ぶ「世界がもし 100 人の村だったら」

世界を 100 人の村にみたてて、世界の現状をわかりやすく伝える授業を行った。

一人ひとりにカードを渡し、その役割を演じてもらうことによって、世界の現状をシミュレーションした。60 人分の生徒の役割カードを英語で作成することはとても時間がかかったが、実際に動くことによって生徒に世界の現状を伝えることは十分にできたのではないかと感じた。

現地校での授業実践

特に文字が読めなかったらどのようなことがおきるか、と言うシミュレーションは生徒の心によく伝わり、最後の感想で「自分の今もっているもの、今生きていることに感謝したい」と書いてくれる生徒が多かった。また、最後に映像で世界の様子を伝えるよう工夫した。

現地校での授業実践は、世界どこでも中学生は変わらないと感じるよい経験となった。しかし、つたない英語のため、世界の格差や多様性の大切さ、現状を伝えることはできたが、さらに深くまで掘り下げることはできなかった。さらに英語力を上達させ、また挑戦したいと感じた。

また導入で行った「日本のクイズ」は、授業の内容以上に盛り上がり、生徒の集中力を感じるものだった。マレーシアの子どもは日本のアニメやマンガをとおして、とても日本に興味をもっており、もっともっと日本について知りたいという気持ちが強いように感じた。これから多くのマレーシアの人々が日本に旅行や留学をするだろうと思うと、日本の生徒も、もっとマレーシアやイスラム教について学ぶ必要があると強く感じた。

〈授業で利用した参考文献〉　世界がもし 100 人の村だったら

(3) 実践３　現地校視察と現地校との交流

〈現地校視察〉

マレーシアは、マレー系、中華系、インド系など様々な人種が混在していながらも、それぞれの文化を認めあっており、これからの多文化社会のすばらしいモデルになり得る国であると感じる。また学校もそれぞれの人

種の学校、誰でも入れる学校、イングリッシュスクール、インターナショナルスクールと様々で、とても興味深い国である。これら様々な学校を訪問することで、多文化社会の在り方や自分の教育の在り方について深く考えた。

①中華系の学校　「寛柔中学校」「寛柔小学校」

中華系の学校は市のいたるところにあるが、どこも児童生徒数1000人を超える大きな学校ばかりである。生徒のほとんどが中華系で、マレー系やインド系は若干名しかいない。様々な祝日があるたびに、無料で食事に招待をするのが文化であり、その盛大さに驚くことが多々あった。

大変優秀な生徒も多いが、マレーシアにあるブミプトラ政策（マレー人優遇政策）により、大学の進学や留学はマレー人が優遇されており、中華系の人々には厳しい現実があるように感じた。これは中華系に限らず、インド系の学校においても同じであり、中華系やインド系の人々が常にもっている悩みでもある。

②マレー系の学校　「スリアラム校」「コタマサイ校」

ほとんどの生徒がマレー系であるが、インドや中国系の生徒も若干通っている。ブミプトラ政策により、マレー系の生徒が大学進学に有利であるために、マレーシアにおいてマレー語を学ぶことは大きな強みである。マレー語を中心に授業は進められるが、英語の能力も高く、どちらの言語でも対応できる生徒が多かった。クラスはレベル別に分けられていて、きめ細やかな授業ができるよう配慮されていた。

午前と午後の部の２部制であり、その中間にあたる昼間に、学校にあるモスクへ集合し、コーランを学んでいた。また、その間、イスラム教でない生徒たちは、人種ごとに集められ、それぞれの道徳について学んでいた。

③イングリッシュスクール　「Abu Bakar 校」

ジョホールで唯一日本語教育が行われている学校であること、王族の子女も通う学校でもあり、大変優秀な生徒が集められている。創設当初からイギリス人が多く関わっており、英語教育にとても力を入れている。英語と理科についてはオールイングリッシュで授業を行っている。また、多くの生徒が基本的英語の能力が身についている。生徒は日本の中学生と比べると、はるかに大人に見え、礼儀も正しかった。

④インターナショナルスクール　「エクセルシオール」「マルボロカレッジ」

ジョホールには、多くの日本人が住んでいるが、その中でもインターナショナルスクールに通わせることを目的にマレーシアに来ている人もたくさんいる。欧米に行くよりも安く通わせることができるのが魅力である。

特に「マルボロカレッジ」は、英国キャサリン妃も卒業した名門で、初分校であるために、テレビでもとりあげられ話題になっている。90エーカーの土地に欧米風の建物の教室８棟、学生寮、テニスコート10面、ラグビー６面、サッカー場２面など、開放的で、まるで英国に来たような気持ちになった。教師はほとんどがイギリス人で、美しい英語を話し、一度見学をすれば、誰もがここで学びたいという気持ちにさせるような雰囲気があった。

〈現地校との交流〉

赴任した３年間にわたり、１年に２回（受け入れ１回　訪問１回）、マレー系の学校「コタマサイⅡ校」と国際交流を行った。

コタマサイ校の受け入れ

第一部

・ソーランや太鼓の披露　・レクレーション

第二部

・日本文化の紹介（茶道　折り紙　けん玉　おはじき　染め物　習字体験　お好み焼き）

コタマサイ校への訪問

・マレーシアのダンス（ザピン）　・アラビア語講座

・マレーシアのお菓子づくり　・セパタクロー体験

・衣装体験、ヘナ体験　・伝統楽器体験

茶道を教える生徒たち

内容は生徒が何をしたら相手の人は喜んでもらえるかを自分達で考え、企画した。

普段英会話の授業で英語を話す機会はあっても、外部の人と話す機会はあまりないので、英語のセリフや説明づくりは、たくさんの時間を要した。はじめは緊張でなかなか話せないが、接しているうちに、同じ感覚をもつ中学生だということを感じ、楽しい時間を過ごすことができていた。

また、取り組みを通して、食べるものを配慮したり（豚肉を使ったものは調味料でも使えない、苦手な味があるなど)、服装を遠慮したり（肌を見せない)、男子生徒と女子生徒は握手や手をふれたりしないなど、気をつけるべきことがたくさんあった。これら一つひとつが、相手の文化、宗教を理解することにつながり、他文化理解へのとてもよいきっかけになった。

３．おわりに

日本から世界を見て授業をしてきた自分が、実際に世界に出て、世界から日本をながめることで、様々な視点の変化があった。

常夏の国、マレーシアで生活をしていても、耳にするのは日本の災害ニュース。住んでいたときはあまり気にならなかったが、日本の災害の多さ、夏には熱中症、冬は豪雪と、その自然環境の過酷さに、改めて気づいた。また、マレー系の人が信じるイスラム教にふれ、日本人が多々イスラム教について誤解をしていることに気づいたり、宗教を理解することが世界の人々を理解することにつながることなどを再認識した。

マレーシアはマレー系の人々が多く住む国であるが、中華系、インド系など様々な文化の人々が混在している国である。宗教によって、食べるもの、居住スタイル、服装、生活習慣、行事とすべてがバラバラであるのに、お互いを理解しあう努力をし、世界の手本となる多文化社会が形成されているように思う。日本人だけの感覚で生活している私たち日本人が学ばなくてはならないことはたくさんあると感じた。

マレーシアでの３年間の生活、研究実践を通して、日本の良さや課題が明らかになり、赴任前よりも大きな視点で日本や世界が見られるようになった。この経験をいかし、日本でも「持続可能な社会のためにわたしたちができることは何か」を考え続け、「世界の問題を考えていけるような、自己肯定感の高い生徒の育成」に向けて、努力を積み重ねていきたい。